

井上円了の若き学習ノート

Schulhefte von Enryo Inoue

柴田 隆行

Takayuki SHIBATA

1. 井上円了の学習ノート概要

井上円了が作成した学習ノートが、東洋大学井上円了研究センターに多数保存されている。これはもと東洋大学附属図書館が所蔵していたものであり「1-04 6 東洋大学・井上円了関係研究資料（A4判）」と題されたりストが同図書館にて作成されている。現時点で評価するならば最初から作りなおす必要があると思われるリストではあるが、このリストから、井上円了が東京大学哲学科生だった頃にとったと思われるノートを拾い上げるならば、次の通りである。このうち*印を付したものは筆者が翻刻し、国際井上円了学会のホームページにて公開している。

1-1-2-7 『由氏哲学史 井上円了』

1-1-2-18 『妖怪学 第五』

1-1-3-1 『古代哲学 明治十七年六月 井上円了』*

（筆者による翻刻と註は『井上円了センター年報』第27号2019年に掲載。）

1-1-3-2 『最近世哲学史』*

1-1-3-3 [Philosophy is meditation ...]*

1-1-3-4 『英国哲学書』*

1-1-3-5 『古代哲学』*

1-1-3-6 『研究ノート 心理学』*

1-1-3-7 [論理学]*

1-1-3-8 『哲学概論 明治廿七年九月起稿』

1-1-3-9 『妖怪研究論 妖怪学 第一 哲四年生井上円了』

1-1-3-10 『妖怪学 第二』

1-1-3-11 『妖怪学 第三』

1-1-3-12 『妖怪学 第四 図書館備』

1-1-3-16 『比較宗教学』

1-1-3-17 [華嚴宗ノ綱領]

1-1-3-28 『東洋哲学 印度哲学 明治廿七年九月起稿』

1-1-5-3 『旧稿 明治十五六年中起稿』

1-1-5-5 『文稿 明治十六年一月』

1-1-5-7 『漫遊記 第一編 井上甫水』(明治10年～14年)

1-1-5-8 『漫遊記 第二編 井上甫水』(明治14年～18年)

(この2点の翻刻文は『井上円了センター年報』第1号1992年に掲載あり。)

1-1-6-1 『東洋哲学史 卷一』(井上哲次郎口述)

(これは三浦節夫氏が翻刻し、同上誌第27号に掲載されている。)

1-1-6-2 『稿録 乙号 哲学概説 明治十七年七月 井上円了』*

1-1-6-3 『支那哲学 東洋哲学講義 第三編』

1-1-6-4 『第一学期分 八宗綱要 第一編』

1-1-6-5 『語彙別記 制度通 聴講記 第一号 田中学士口演』

1-1-6-6 『仏書講録 原担山・吉谷両師講 文一年生井上円了』*

1-1-6-7 『漢書抄録 文学部 井上円了』

1-1-6-8 『仏書抄録 文学部 井上円了』

1-1-6-10 『雑稿 甲号 孟子論 吊文 明治十七年九月 哲四年生井上円了』

1-1-6-11 『雑稿 丁号 諸稿 明治十七十八年 哲四年生井上円了』*

1-1-6-13 『法律聴講』(入江講師述)

1-1-6-14 『生理学聴講記 明治十八年一月 哲学四年井上円了』

これらとは別に、『明治十六年秋 稿録 文三年生 井上円了』と題する、おもに英文テキストからの抜粋ノートがあり、これは現在も東洋大学附属図書館が所蔵している。原本は特別資料室でのみ閲覧可能であるため、筆者が翻刻して pdf 版を作成し、国際井上円了学会のホームページで公開している。この邦訳は、ライナ・シュルツァ氏と筆者の共訳で『井上円了センター年報』第19号2010年9月に掲載されているほか、井上円了がこのノート作成の際に参照した文献の書誌情報と分析はシュルツァ氏が行い同誌に掲載されている。

これら初期学習ノートの分析により、井上円了が、近代日本における哲学形成に大きな影響を与えたと言われるアーネスト・フェノローサとは独立に、自ら何を学び自己の哲学形成に活かしたかを知る貴重な情報を得ることができるとともに、円了が哲学を学ぶだけではなく、すでに学生時代から哲学を日本に広めようとしていた事実を知ることができる。

2. 1-1-3-1 『古代哲学 明治十七年六月 井上円了』(1884年)、178ページ

このノートは *An Epitome of the History of Philosophy. Being the work adopted by the university of France for instruction in the colleges and high schools. Translated from the French, by C.S.Henry. 2 vols. New York 1842* からの抜粋ノートである。この著作の原著者は、ストラスブール大学哲学教授 Louis Eugène Marie Bautain (1796-1867) ではないかと目されているが、この著作の原典を

調べている井上円了研究センター客員研究員の長谷川琢哉氏によれば、フランス語原典は *Précis de l'histoire de la philosophie*, publiée par les directeurs de Collège de Juilly であり、著者は Bautain ではないのではないかという。標題紙に書かれている Collège de Juilly の当時の directeurs は Antoine de Salinis (1798-1861) と Bruno-Casimir de Scorbiac (1796-1846) であるが、それだけでは彼らが本書の著者であるとは言いきれず、著者が誰であるかは明確でない。なお、このノートの121頁以降は Johann Eduard Erdmann, *A History of Philosophy*. English translation edited by Williston S. Hough, vol.1, London 1893 を参照（とくにソクラテスとアリストテレスの項目）している。

前者の原典である英訳書の目次は以下の通り。

第一卷 古代哲学

第一期 東洋哲学としてインド、中国、ペルシア、エジプト、カルデア・フェニキア

第二期 ギリシア哲学

第三期 キリスト教時代の最初の数世紀の哲学

第四期 中世哲学

第二卷

第五期 現代哲学

第一段 クザーヌス、パラケルスス、テレジオ、カンパネラ、ブルーノ等

第二段 ベーコンからライプニッツまでとカントからリードまで

このうち、第1巻第2期までがこのノートの対象であるが、第2巻の現代哲学のうちイギリス哲学に関しては、円了学習ノート1-1-3-4「英国哲学書」で参照されている。

井上円了による「明治十六年秋 稿録」にこの Epitome 読書の抜粋ノートがある。円了が下線を敷いて注目しているのは、おもに著者が比較哲学的考察を加えている箇所であり、そうした点に円了の関心が向けられていたと思われる。

本ノートに話を戻し、インド哲学史については原典にほぼ即してノートされているが、中国哲学史について、とくに孔子については原典のごく一部しかノートされていない。これは、円了が中国哲学史に興味がなかったのではなく、原典に記された中国哲学史の記述からは学ぶべきものが少ないと円了が考えたからではないかと思われる。また、原著者はコールブルクの所見を所々で参照しているが、それらについても円了はいっさいノートしていない。

興味深いのは、外国文献や諸概念をすべて日本語に訳し換えて考察している点である。たとえば transmigration 「成仏」、rational 「無量」、individual liberty 「自己独立自由ノ気」等。また、ノートに挿入された井上円了による感想や疑問も興味深い。たとえば、原典で

Exposition.

1. Brahm existed eternally, the first substance -- infinite -- the pure unity. He existed in luminous shadows ; shadows, because Brahm was a being in determinate, in whom nothing distinct had yet appeared ; but these shadows were luminous, because 20/21 being is itself light. Bra-

hm is represented also as originally plunged in a divine slumber, because the creative energy, as yet inactive, was, as it were, asleep.

2. When he came out of this slumber, Brahm, the indeterminate being, of the neuter gender, became the creative power, Brahma, of the masculine gender. Brahm became also the light, determinate intelligence, and pronounced the fruitful Word which preceded all creation. 20f.

とある部分について、これを和訳すると、

解説

1. プラムは永遠に実存する第一実体であり——無限な——純粹統一体であった。プラムは光輝く影のなかに実存した。影だというのは、プラムは有限の存在であり、そこではまだ何もはっきりと現れていないからである。しかし、この影は光輝く。というのは、存在それ自体が光だからである。プラムはもともと神的な眠りに陥ったものとして表象されたが、それは創造のエネルギーがまだ働かずあるがままに休眠していたからである。

2. 彼がこの眠りから醒めると、中性の直接存在であるプラムは創造力となり男性のブラマとなった。プラムは有限な知性である光となり、あらゆる創造に先立つ実り豊かな言葉を発した。

となるはずだが、井上円了はこれを以下のようにノートしている。

説明○「ブラム」[Brahm] 即チ原始体 (first substance) 純一体 (pure unity) ハ不生不滅ニシテ永久生存スルモノトス其理体タルヤ純一ノ理ニシテ差別ノ事相アルコトナシ差別ノ外相ハ即チ有体ナリ故ニ此理体ハ有体物体ノ内部ニ成立ス其中自ラ創造力ヲ有スト雖モ最初ハ之ヲ潜藏シテ毫モ外ニ示サ、ルヲ以テ睡息セリト云フ (此体ヲ即チ創造神ト立ツルナリ) 此神体睡息ヨリ醒起スルニ当リ其始ハ無差別ノ理体ニシテ男女陰陽ノ別ナキモ忽チ変シテ男性ノ婆羅門神 [婆羅門神 Brahma] トナリテ創造力ヲ発ス此神又光明トモナリ智慧トモナリ言説トモナレリ

文中丸括弧内の太字部分は、円了による補足的註解である。第一実体ないし純粹統一体を「原始体」「純一体」と訳すことは良いが、それを「理体」と言い換えることの理解のためには、井上円了による「純正哲学」全体のシステムを知っておく必要がある。というのも、円了は「理」を「物」と「心」と並ぶ存在として理解し、「体」は「象」と対をなすものと理解しているからである。(詳しくは拙稿「純正哲学」、東洋大学井上円了研究センター編『論集 井上円了』教育評論社、2019年を参照されたい。)

3. 1-1-3-5 『古代哲学』(1890年)、100ページ

古代哲学に関するノートは、明治23年1月から5月の間に入籍した哲学館会員名簿の余白および名簿一覧後の余白ページに記されている。

国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている哲学館講義録「古代哲学」篇は明治27(1894)年に公刊されているが、その内容と重複する部分が少ないので、この期間に作成されたノートと思われる。ノートされた事項の多くは、上述のエルトマンによる英訳哲学史を参照したもの

と思われる。

父ハ Ariston ト云フ 雅典府 Athens ノ貴撰ナリ 貴撰ノ家ニ生レタルヲ以テ相応ノ教育ヲ受ケタルニ相違ナキモ其教育ニ就キテハ詳細ノ事今日ニ伝ハズ

氏ノ境遇ハ哲学者ニナルヨリハ政治家ニナル方大ニ適シタルモ其時ハ「アセス」共和政治行ハレテ民衆ノ主領タルモノ軍人モアリシガ氏ハスル人物ニ膝ヲ屈スルカ如キ卑屈家ニアラズ故ニ政治界ニ入ルヲ好マズシテ自ラ學術ヲ修メテ哲学ヲ出ツトスルニ至ル也

斯クシテ二十歳ノ時「ソクラテス」ノ門ニ入り八年間師ノ教授ヲ受ケタリ；然ルニ氏ノ著書中ニハ己レノ師トノ一身上ノ関係ノコトハ余リ記載シテ見エザリシモ氏ノ学ヲ考フルニ「ソクラテス」ノ影響ノ大ナルコト自ラ知ルベシ

内容は現在では周知の事柄ばかりで新鮮味に欠けるが、円了が西洋哲学を学んだ明治初期にはそれなりに貴重な情報であった。ほぼ同時期に真宗大学寮で開かれた清澤満之の哲学史講義と比較するならば、井上円了が哲学普及のために門戸を広く開けて開校した哲学館およびそのいわば通信教育に相当する館外生用の講義録でとくに顕著に見られるように、井上円了は各哲学者の思想の論理構成よりもその意味およびその哲学者の生涯に着目してノートを作り講義をしていることがわかる。

たとえば、井上円了による哲学館講義録『古代哲学』1894（明治27）年版では次のように講じられている。

ターレス氏は哲学者といはむより寧ろ理学者といふべく其哲学も数学、及天文学より起れり氏は日蝕を前知し又一年を三百六十五日に配当したりきといふ〔略〕終に水を以て其本体と定め是より万象の現出せるものとせる是れ宇宙水体論なり

あるいは、哲学の形成を個人の思索に求めるよりも、時代の産物として捉える見方もうかがえる。哲学の起元は之を人種の起元に比すれば是も後世の事なれば同人種同思想より出でたる外に航海通商交戦などの事情これが媒介となりて同結果を致したる事亦疑ふべからず

4. 1-1-3-2 『最近世哲学史 附 実験哲学派』、200ページ

ヘーゲル以後の哲学が扱われており、取り上げられているおもにドイツの哲学者で現在はまず話題に上ることのない人物や学説が細かく紹介されており、ユーバーヴェークの哲学史（Friedrich Ueberwegs *Grundriss der Geschichte der Philosophie*. Berlin 1896）の英訳版を参照していると思われるが、記述内容から判断すると Johann Eduard Erdmann, *A History of Philosophy. Vol.3. German philosophy since Hegel*, English translation by Willison S. Hough. London 1890 からの抜粋ノートである可能性が高い。

ヘーゲル死後其学ニ反対シタル論者世ニ出テ之レト同時ニヘーゲル保護論者アリ 其保護論者ハ常ニ其節ヲ伝フルノミナラズヘーゲルノ論ノ判然セサル所ハ之ヲ明確ニセルコトヲ務メリ 第一ノ反対ハ氏ノ論理学ニ対シテ起レリ此反対ハ氏ノ生時ニ於テ起レリ

以下、ヘーゲル派の保護論者として Göschel、その反対論者として Friedrich Julius Stahl、

Fichte (Immanuel Hermann —) が紹介され、また、たとえば、

ワイゼノ論ヲ批評シタルモノニガブラーアリ Gabler (1832)

スタールハフユエルハフ氏ニヨリテ駁サレタリ Feuerbach (1835)

フィヒテハミツチエレットニヨリテ批評ヲ受ク Michelet (1830)

ブラニスハローセンクランツノ批評アリ Rosenkranz (1835)

というように紹介され (エルトマン『哲学史』英訳24ページ)、さらに、Julius Schaller, Carl Friedrich Bachmann, Anton Günther, Johann Heinrich Pabst, Moritz Wilhelm Drobisch, Friedrich Edward Beneke, Fries, Johann Friedrich Herbart, Ludwig Andreas Feuerbach, Friedrich Richter, David Friedrich Strauss, Bruno Bauer, Michelet, Richard Rothe, Arnold Ruge, Theodor Echtermeyer, Edgar Bauer, Friedrich Feuerbach, Karl Philipp Fischer, Karl Leonhard Rei—), Reinhold 等々の名と学説が挙げられているが、このうち現在でも多少なりとも話題に上るのはルートヴィヒ・フォイエルバッハ、シュトラオス、ブルーノ・バウアーぐらいである。

5. 1-1-3-3 (Philosophy is meditation)、97ページ

このノートには表紙がなく、英文の本文のみが記されている。8ページ目に Oct. 11th. 11-25. Reading in Notes on Philosophy という記述がある。何年の10月11日かは不明である。11-25は11時25分か、あるいは11日から25日か。16ページ目に October 10th. とあり、日付が戻っているのも不思議である。欄外に to Page 54 とか P.105 とかと記述されている箇所もあり、書物を参照している可能性が高い。いくつかの文章を選びネット検索しても、いまのところ、一致する文章がヒットしないので、誰かの講義の聴講ノートを清書した可能性も考えられる。仮に聴講ノートだとしたら、講師はアーネスト・フェノロサか外山正一と思われるが、清澤満之のフェノロサ聴講ノートを研究している大谷大学の研究者によると、話の組み立て方や用語法からしてフェノロサの可能性は低いという。

このノートの中心テーマは哲学と科学との関係である。フェノロサが東京大学で学生たちに繰り返し説いたのもおもにこの問題であった。たとえば、1879年9月20日開講の哲学史講義の冒頭の内容は、聴講生の市島謙吉によれば (早稲田大学図書館蔵『哲学講義 市島謙吉自筆本』)、哲学と他の諸学との違いについてであり、井上円了も同席している社会学講義 (金井延による1882年9月21日開講社会学講義筆記。秋山ひさ編集・解題『フェノロサの社会学講義』神戸女学院大学研究所、1982年)でも、また、高嶺三吉による1884年1月7日開講の哲学史講義筆記 (『フェノロサ「哲学史」講義』監修解題池上哲司、2013年)でも、哲学と科学の違いが縷々語られている。「哲学」なるものが日本に紹介されて20年そこそこの時代の学生向け講義では、そもそも哲学とはどのような学問であり、それは他の諸学とどのように異なるかを詳しく説明しなければならないのは当然のことであろう。しかし、円了のこのノートでは、哲学と科学との違いの初歩的説明に留まらず、当時の学界で議論されている専門的な諸問題にまで話が及んでいる点が特徴的である。冒頭一節を、原文に拙訳をつけて紹介しよう。

Philosophy is meditation; scientific reflection on the nature of things. But this definition is too wide and vague. It does not express sufficiently the peculiar character of the essence of philosophy.

Philosophy is, first of all, a science. It will give a scientific explanation of the world.

Now, what does the term "science" mean, and what distinguishes a scientific explanation, such as philosophy gives or intends to give, from unscientific explanation, f.i. those which common <expiience>[experience] religious systems, and mythological speculations have supplied long before science and philosophy were established.

哲学は瞑想であり、事物の本性についての科学的反省である。だが、この定義は広すぎるし曖昧すぎる。これは、哲学の本質が持つ特徴を十分表現していない。哲学は、まずもって、一つの科学である。それは、世界について科学的説明を与えようとする。ところで、「科学」という用語が意味するものは何か、哲学が与えないしは与えようとする科学的説明を非科学的な説明から区別するものは何か。正確に言えば、科学や哲学が成立するずっと以前にそれらを提供していたのは、共通の経験とか宗教体系、神話的憶測とかであった。

6. 1-1-3-4 『英国哲学書』、110ページ

冒頭に「斯氏道義学」とある。以下の内容からして、これは Herbert Spencer, *Principles of Ethics*, in two volumes. London 1879-1892 であることは間違いない。

○第一章 「コンタクト」ノ惣体

部分ヲ知ルニハ全体ヲ知ラサルヘカラス故ニ余ハ道德ノ全体即チ「コンダクト」ニツイテ論スルナリ
「コンタクト」ハ目的ニアテハメラレタル作用ヲ云フ

○第二章 「コンダクト」ノ進化

第一 造構 Structure

第二 作用 Function

第三 コンダクト Conduct

此三世ハ互ニ造化スルモノナリ

19ページから「近世哲学」と題して、イギリスだけではなく、デカルトやスピノザ、ライプニッツ、ガリレオ等々、英仏独伊ほか著名なヨーロッパの哲学者の説が記されている。参考にされた文献は Bowen, Schwegler, Ueberweg の英訳哲学史、および前述の Henry 英訳 Epitome などである。

7. 1-1-3-6 『研究ノート 心理学』、89ページ

このノートは、紙質から推察するに、3種類の別のノートを綴じたものである。1つは、Friedrich Paulsen, *System der Ethik mit einem Umriß der Staats- und Gesellschaftstheorie*. Berlin 1899. から一字一句変更なしの抜粋引用であり、もう1つは、Oscar Browning, *An Introduction of Educational*

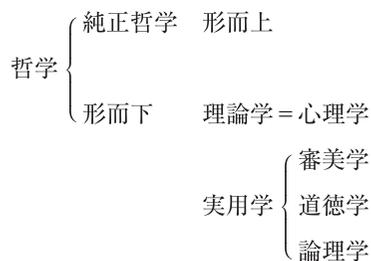
Theories. London 1883. の目次を転写したものである。

これらとは内容を異にする、この綴りの大半を占める部分は、心理学的に考察した教育学を内容とする。「23写象ノ起原」「24直覚」等の認識論ないし心理学的項目もあるが、多くは教育学であり、「26言語ニヨリテ児童ノ自然的ニ発達スルコト」「児童ガ一物体ヲ見ルコト二度三度ニ及ベバ之ヲ認識ス」「品性ノ陶冶」「教育ノ目的トハ何ゾヤ」、比較的連続した記述が見られるのは、「第三項 教授ノ手続論」で、「第一章 教育ノ方便論」「第二章 教育ノ主義論」という構成である。

所々に、欄外メモとして「Begierde 渴望 Leidenschaft 情操」「Behalten Merken」「良心的（内面的自由）完全、善意、正及義 Gewissenhaftigkeit, Vollkommenheit, Wohlwollen, Recht, und Vergeltung (Gerechtigkeit)」というようにドイツ語の専門用語がメモ書きされており、ドイツ語原典を読みながらノートをとったものと思われる。しかし、『明治十六年秋 稿録 文三年生 井上円了』と題するノートはすべて英文テキストの抜粋ノートであり、ドイツ語文からのノートは1つもないので、このノートは井上円了のものだろうかという疑念が湧く。しかし、たとえば「功」という字の書き方に典型的に見られるように、筆跡は円了の他のノートと同じであり、円了が作成したノートであることは間違いない。

8. 1-1-3-7「論理学」、96ページ

冒頭に「第一講 哲学範圍中論理学ノ地位及ヒ其心理学トノ関係」とあり、円了の多くの著作で使われている下記の図が描かれている。

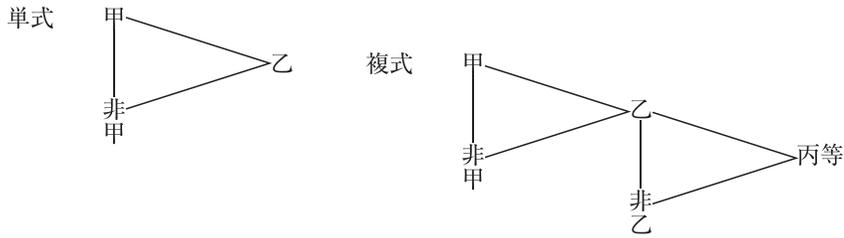


ヘーゲルは論理学を形而上学として考えるが、井上円了はこれを形而下を扱う哲学とし、知力に関わる実用学に含めている。そして、「知力ノ発達」として、第一 感覚、第二 知覚、第三 再現、第四 構成、第五 虚想（思想）とし、この最後の項目を「(甲) 概念 = 名辞、(乙) 断定 = 命題、(丙) 推論 = 推測式」としているが、これはアリストテレス以来の論理学の三要素にはかならない。

第二講で論じられる三断論法は、ヘーゲルの弁証法をフェノロサ的図式主義に当てはめて理解するものであり、いわゆる「正反合」として展開される。

三断法ハ精神発達ヲ知ルモノ





9. 1-1-6-1 『東洋哲学史 巻一』井上哲次郎口述、101ページ

東京大学哲学科最初の卒業生である井上哲次郎が、ドイツ留学する以前に東京大学で行った講義を井上円了が聴講して取ったノート。同じ講義を高嶺三吉もノートしており金沢大学附属図書館に遺稿として保管されているが、井上円了のノートと比べると誤記や不明箇所が多い（水野博太『高嶺三吉遺稿』中の井上哲次郎『東洋哲学史』講義『東京大学文書館紀要』第36号、2018年3月参照）。円了ノートには聴講日が記されており、これによってこの講義は1882（明治15）年に始められたことがわかる。この講義は、前述の通り、三浦節夫氏により翻刻され公開された。冒頭部分は以下のような具合である。

儒学起源

義解○儒ニ二義アリ一ハ孔孟ノ道ヲ学ブモノヲ云ヒ一ハ總シテ諸学ニ通スルモノヲ義トス然レドモ爰ニ儒学ト云ヘシハ孔孟ノ学ヲ指ス

由来○孔孟ノ道ニ全ク二子ノ思考ニ出デタルモノニアラズ其本ク所ハ虞唐禹湯文武ニアリト雖トモ二子ノ増飾附加スルモノ尠シトセズ

右引證 孔子ノ堯舜文武ヲ祖述シタル證ヲ引クナリ

中庸曰 仲尼祖述堯舜憲章文武

論語曰 述而不作信而好古

然レドモ二帝三王ハ孔子ニ拠テ始テ世ニ顯ハルモノト知ルヘシ

10. 1-1-6-2 『稿録 乙号 哲学概説 明治十七年七月』、184ページ

これは井上円了が故郷の新潟長岡地区の各所を訪ねて講義をした記録として重要である。これは、円了の『漫遊記』の記述と合わせて読むと、講義状況を理解しやすい。

冒頭に次の2行のメモ書きがあり、1ページ置いて以下、具体的な内容記述が始まる。

○古志郡ニ王神ト称スルモノアリ至テ悪神ニシテ人ニ災禍ヲ与ヘ病患等ヲ与フルノ力アリト云フ

○此伏ニカヲ利ニスル術アリト云フ

教学関係論 服ノ町ニ於テ

井上甫水（円了の号）『漫遊記』に、1884（明治17）年「七月二十三日ヨリ二十六日間三島郡服之町学場ニ遊ヒ」とある。当地は現在新潟県長岡市に属する。

緒論

真理ハ無真理中ニアリ 西ノ諺ニトクカ如シ

真理ハ無味ノ中ニアリ 水ノ如シ

宗教ハ外相ハ無真理ノヤウナレドモ却テ真理ヲ含藏ス

宗教若シ全ク無真理ナラハ今日世ニ伝ハルベキ理ナシ

「カイコ」ト「イモムシ」ノ如ク「ヘビ」ト「ウナキ」ノ如シ [以下略]

長岡妙宗精舎ニ於テ講義科目

前述『漫遊記』によれば、円了は1885（明治18）年7月27日、「長岡ニ到リ田中長尾諸氏ヲ訪ヒ妙宗寺ニ泊ス翌日大橋赤沼ヲ訪ヒ又妙宗寺ニ泊ス」とある。ただし、このノートの時系列からすれば、三島郡服ノ町に続き「二十九日ヨリ三十一日マテ三日間長岡ニ止マリ」とあるので、このノートはこの時に作成されたものと思われる。なお、円了の実家である慈光寺は、この妙宗寺の末寺である。

哲学講義として、その全体像が示されているが、この項目を1つずつ取り上げて講義をしたら1年以上かかるであろう。ここでは全体像を示しただけと思われる。

哲学講義

唯物論

第一、緒論

第一節 西洋学ト東洋学ト径庭アル所以

第二節 唯物論ハ理学進歩ノ結果ナル所以

第三節 物神兩界論

第四節 唯物一元論

第二、本論

第一講 心身関係論 [以下紙面節約のため横並びとする。]

第一節 身体構成 第二節 神経統系 第三節 感覚中枢 第四節 情緒ト客観トノ関係 第五節 精神所定ノ実証

第二講 物理勢力論

第一節 物質種類 第二節 分子変化 第三節 勢力種類 第四節 活力変化 第五節 生力ハ活力ノ一種ナル所以 第六節 心理ハ物理ノ一種ナル所以

第三講 万物起源論

第一節 社会起源 第二節 人類起源 第三節 動物起源 第四節 植物起源 第五節 魚生起源

第四講 進化作用論

第一節 競争作用 第二節 淘汰作用 第三節 順応作用 第四節 遺伝作用 第五節 分化作用 第六節 合成作用

第五講 宇宙造成論

第一節 天地造成 第二節 山河造成 第三節 有機造成

第六講 唯物応用論

第一節 心理学 第二節 社会学 第三節 教育学 第四節 倫理学 第五節 宗教学

第三 結論

第一節 全論ノ要旨 第二節 唯物論ノ影響 第三節 耶蘇教ノ関係 第四節 唯物ノ癡論タル所以 第五節 唯物ニ対シテ唯心論ノ起ル所以 第六節 唯心唯物ニ対シテ二元論ノ起ル所以 第七節 仏教比考 第八節 将来ノ盛衰

哲学講義 哲学概論 於新津

『漫遊記』によれば、円了は1885（明治17）年8月「十三日ヨリ中蒲原新津駅ニ転遊ス其駅菓城蘭若ニ駐マルコト六日間ナリ」とある。ここでは「第壹講」として「哲学大要」が示されるが、省略する。

哲学講義 唯心論 於浦村

浦村は井上円了の生誕地である。円了は1885（明治17）年7月から9月に帰郷し近隣の町に出かけた。

哲学講義 於鳥越浄覚寺 八月二十三日より

『漫遊記』には、新津から移動し、「二十三日ヨリ三日間鳥越ニ遊フ国中ノ漫遊終ハリテ上京ノ途ニ就ク」とある。「漢国氏斯濱撒氏「ヘーケル」氏ノ哲学ヲ講ス」と記されている。

哲学要義 於長岡開延

上段 緒論 第一節 西洋学ト東洋学ト径庭アル所以〔以下略〕

令知会雑誌草稿 哲学要領

哲学概論 於新潟及三條

宗教論 新津 果上寺 菓城寺

八月三日 実体論、八月四日 物心二者関係、八月五日 経験、唯覚、唯物、八月六日 応用哲学 新津夢城ニテ 哲学講義

於鳥越

11. 1-1-6-6『仏書講録 原担山・吉谷両師講 文一年生井上円了』、56ページ

用紙は56ページ分あるが、記述されているのは2ページ、維摩経に関するごく初歩的な用語解説のみであり、他は白紙である。

たとえば、「蓋纏 煩惱 総持 言ニモ文字ニモ用ユ 布施 貪欲ヲ離レン為ナリ 持戒 心ノ悪キヲ制スルコト 忍辱 忍耐力ノコト 精進 勉強力ノコト」等々。

1877（明治10）年4月に開校した東京大学の第一科は「史学哲学及政治学科」である。1879年9月に最初の学科改組があり、第一科は「哲学政治学及理財学科」と改められた。この改訂の際に、「仏書講義ノ一科目ヲ置キ文学部各級生徒ヲシテ随意聴講セシム」（『東京帝国大学五十年史』東京帝国大

学、1932年、693頁)とされ、曹洞宗の禅僧原担山がこれを担当した。同書には、「西洋哲学に偏せず東洋哲学にも兼ね渡るべき事は、日本の大学として最も緊要なることなれば、仏書を授くるの必要なことは言ふまでもなし。当時東洋哲学を重要視する傾向漸次生じ、十四年に至り哲学を西洋哲学と改め、印度及支那哲学を加ふるに至れる」(同716頁)とある。『井上哲次郎自伝』(富山房1973年)によると、加藤弘之が「どうも仏教にも哲学があるやうだから、大学に於ても仏教を講じて貰つたらどうだろう」(7頁)と提案し、学生の賛同を得て始まったという。この講義を聴講した井上哲次郎によると、大乘起信論等が教科書に使われ、「自分は原担山に就いて仏典講義を聴き、始めて大乘仏教の哲学の妙味を知った。それが縁となつて其後仏教とは断つに断たれぬ関係が出来」たという(井上哲次郎『懐旧録』春秋社、1972年、294頁)。

「東洋哲学」生成における原担山の果たした役割の大きさを指摘する研究が近年進んでいる。たとえば、渡部清は「仏教哲学者としての原担山と『現象即實在論』との関係」(『哲学科紀要』上智大学、第24号、1998年)で、井上哲次郎、井上円了、三宅雄二郎らに見られる「現象即實在論」の原器ないし母胎は原担山の仏教哲学的人間論に見出せる、と指摘している。儒学、漢方医学、西洋医学、仏教寺院住職など多彩な経歴の持ち主である原担山は、明治政府が新設した教部省に勤めたが、文書出版上の事件で辞任させられ、卜占で糊口をしのいでいた時に東京大学総理加藤弘之に出講を依頼された。国際神智学協会会長オルコットが1885年来日した際、仏教は西洋的な意味での宗教というよりも道徳哲学である、と主張したことに対して、原担山は『哲学会雑誌』第1冊第3号(1887年)に「印度哲学要綱」と題する一文を投じ、オルコットは「仏教ハ寧ろ道義哲学ト称スヘキナリ」と言うが自分は「心性哲学ト云フヲ適當トス本校〔東京大学〕ニ於テ印度哲学ト改ムルニ尤モ当レリ」と述べている。加藤弘之は、進化論から大きく影響を受けたのち、とりわけ仏教を宗教としてよりも哲学として捉える見方を強めていた。加藤が原担山を東京大学に招いた時、前述のように担山は教部省を退職させられていたが、これは曹洞宗当局の申請による罷免であり、同時に僧籍も奪われていた。このことが、加藤による東京大学招聘の際にかえって幸いしたかもしれない、と木村清隆は「原担山と『印度哲学』の誕生——近代日本仏教史の一断面」(『印度学仏教学研究』第49巻第2号、2001年、541頁)で指摘している。

原担山はこのようにきわめて注目すべき人物であるが、井上円了の聴講ノートには残念ながらその片鱗も見られない。

12. 1-1-6-11『稿録 丁号 明治十七年十八年』、199ページ

これはのちに「真理金針」という題で公刊された論考その他の草稿集である。「真理金針」の初出は、隔日刊の『明教新誌』明治17年10月以降の連載であり、原題は「余カ疑団何レノ日ニカ解ケン」等である。公刊された「真理金針」の文章に近い表現は、原稿用紙の欄外上部に加筆された一文に見られる。なお、以下の取り消し線は原文のままである。

余今仏者中ノ有力有志者ヲ分析スルニ左ノ種類派種ヲ得タリ

第一類 ~~仏教ノ教タルモノ~~ 耶蘇ノ外仏教ノ敵ナシ

甲派 耶蘇教ハ浅近一憂フルニ足ラス

乙派 耶蘇教ハ富強大ニ畏ルヘシ

第二類 耶蘇ノ外ニ仏教ノ敵アリ

甲派 理学ハ百般器用ノ学恐ル、ニ足ラス

乙派 哲学ノ高尚ナルモ仏教ノ幽妙ナルニスカス

丙派 理学哲学共ニ遠ク仏教ノ及フ所ニアラス

之ヲ要スルニ一ハ自ラ許スコト太過一ハ他ヲ畏ルコト度ニ過キ当ヲ失スルノ二者ニ出テズ共ニ井蛙管見ノ誹ヲ免レサルナリ

余カ疑団何レノ日ニカ解ケン

余ツラ／＼仏者社会ノ実況ヲ観察スルニ疑端百出千疑万惑氷結擬成百方釋クコト能ハサルモノアリ
奇々怪々 千思万慮解スルコト能ハサルモノアリ

8 ページ目からは「修学ノ科目并ニ将来ノ目的ニ付奉上申候愚侶輩」と題する、東本願寺宛の上申書草稿である。東本願寺から派遣された東京留学生は徳永（清澤）満之、今川覚神ほか6名であり、井上円了はその代表として上申書を認め、学校を創設して仏教と哲学を学ぶことの必要性を訴えた。この草稿は非常に貴重な資料であり、三浦節夫氏がこれを翻刻し「哲学館創立の原点」と題して『井上円了センター年報』19号（2010年）で公開している。その冒頭一節はつぎの通り。<>内は朱筆による加筆部分。

先年東京留学ノ命ヲ奉シテ先後年ヲ追テ東上<シ>後或ハ大学予備門ニ入学校シ或ハ同人社或ハ慶應義塾ニ入テ各人其課程ニツイテ定規普通ノ学科ヲ研修シ歳月次第ニ移リ移ルニ従ヒ定規ノ試験モ経テ上級ニ漸進シ已ニ予備門ヲ卒業シテ大学本科ニ就クモノアリ又私塾ヲ卒業シテ大学撰科ニ転スルモノアリ当時ハ私共愚輩六人皆東京大学ニ在学<スルヲ以テ>籍在者初メハ私共統々専修<爰其各今日修ムル所>ノ科目将来<期スル所>ノ目的ヲ開陳シテ奉由ノ厚恩ニ答フルノ微衷ヲ表シ度存シ候<賢明ノ裁可ヲ仰ク所ナリ>伏シテ惟ヲニ<フルニ>僧侶ノ教祖ニ対シ本山ニ答フルノ義務布教伝道ノ目的ヲ達スルニ外ナラス其目的ヲ達スルニ二種ノ方法アリ一ハ實際ニシテ一ハ理論ナリスヘテ学問上ノ研究ハヌヘテ此理論ニ属ス理論ニ又二途ノ方法アリ一ハ自教ノ真理性質ヲ研修スルニ止マリ一ハ自他ノ關係ヲ論究スルニ及テ<ヲ主トス>此二者ハ多少学問ノ性質ヲ異ニスルヲ以テ一人ノ力能ク之ヲ兼ヌヘキニアラス是ニ於テ分業ノ学制ヲ設ケサルヘカラス

29ページからは文学会会員を増やす案の草稿。33ページからは「真理金針」の続き。49ページからは『令知会雑誌』投稿原稿で西洋哲学史の草稿。71ページからギリシア哲学史と続く。但し『哲学要領』に収録された哲学史と重複する箇所はない。

希臘哲学ハ「セールス」氏ヲ以テ学祖トスト雖モ其以前已ニ諸学ノ思想ヲ胚胎スルアリ之ヲ希臘哲学未発ノ時ト称ス然レドモ其元其原已旧時其未タ発セザルニ当テハ第一ニ神学独リ世ニ行ワル之ヲ第一ニ神学ノ世ト称シ第二ニ道義学尋テ起ル之ヲ道義学ノ世ト称ス是皆此論皆東洋ヨリ希臘ニ入ル

モノナリ其思想論説ニ至リテハ極メテ妄誕不怪ニシテ論理ノ以テ〔ママ〕考フヘキナリ事実ヲ以テ証スヘキナシ未タ哲学ノ思想ト称スヘキモノニアラス

82ページから「支那春秋戦国ノ際学者英雄ノ起リシ原因ヲ論ス」と題するメモ風の図があり、84ページから87ページは東京大学幹事服部一三氏米国赴任祝賀会での祝辞原稿。88ページからは「真理金針」に対する東洋毎週新報貴社への反批判文。92ページから「浄名宗義」「不可思議解脱」「仏国」「方便」と章題の付けられた維摩詰の解説があり、98ページは「真理金針」のメモ。99ページからギリシア哲学史の続きが128ページまであり、129ページからふたたび「真理金針」草稿に戻って最後の199ページまで続く。

【Abstract】

Schulhefte von Enryo Inoue

Takayuki SHIBATA

Viele Schulhefte Enryo Inoues besitzt das Forschungszentrum von Enryo Inoue an der Toyo Universiät. Er studierte Philosophie an der Tokyo Universität. Ich entzifferte und setzte seine handschriftlichen Schulhefte auseinander. Hier stelle ich nur einige davon vor. Aber damit kann man wissen, was und wie Inoue als Student die europäische sowie orientarische Philosophie gelernt hat.